

<b>Title</b>	公共図書館における障害者サービスを考える：視覚障害者サービスを中心として
<b>Author</b>	近藤, 友子
<b>Citation</b>	情報学. 5 巻 1 号
<b>Issue Date</b>	2008
<b>ISSN</b>	1349-4511
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学創造都市研究科情報学専攻
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	

Placed on: Osaka City University

# 公共図書館における障害者サービスを考える

## －視覚障害者サービスを中心として

近藤 友子†

### Investigation of Services for visually challenged in Japanese public libraries

KONDO Tomoko†

**概要** 公共図書館員における障害者サービスがどのようなものがあるのかについて考える。一般的に多くの人たちに利用されている公共図書館では利用者の幅が広く、利用に関しての条件もさまざまなものが考えられる。例えば視覚障害者へのサービスでは晴眼者は墨字資料の利用が可能であるが視覚障害者は点字もしくは音に変換した資料の利用となる。近年バリアフリーという言葉をよく耳にし、障害者を持つ人への環境整備が社会的に進んできている印象を受けるが、本稿では事例として枚方市立中央図書館を取り上げて障害者サービスを考える。また日本図書館協会障害者サービス委員会編集の「図書館利用に障害のある人々へのサービス」についての調査を使い、日本の公共図書館における障害者サービスについて特に視覚障害者サービスを中心にしておいて所蔵資料点数等からの考察を目的としていく。

**キーワード** 公共図書館、障害者サービス、視覚障害者サービス

**Keywords** Public Library, Impaired person service, Visually impaired person service

## 1. はじめに

### 1.1 視覚障害者の情報収集

視覚障害者にとって印刷された墨字資料からの情報収集は困難なことであり、一般的な情報入手の方法として考えられる新聞や雑誌等の利用は難しい。視覚障害者が墨字資料などから情報入手を行なうためには触覚による情報入手の方法として「点字」に変換するか、もしくは書かれている文字や図などを音（声）に変換することで利用できるように「音（声）訳」を行って利用する方法が考えられる。点字の場合は印刷されている墨字の情報を触覚で情報入手が可能になるように点字に変換する。現在一般的に利用されている点字は六つの点からなる六点点字である。音による資料の

利用は墨字で書かれている文字や図などを音（声）で表わすことにより聴覚から情報入手を行なうという方法である。音に変換するにあたっては人による読み上げもあれば、コンピュータの読み上げソフトによる場合もある。点字も人が手で点字を打つだけでなく、テキストデータを点字印刷機により触覚で利用できる点字資料に印刷することも可能である。デジタル化によりデータをコンピュータによって利用可能となってきた今日の視覚障害者サービスにおいては、情報収集の方法において情報機器の発達なども大きな意味を持つものといえる。

### 1.2 障害者サービス:その目的と背景

一般に多くの人々が利用する公共図書館においては、障害を持つ人も利用することが考えられる。障害を持つ人に対する利用者サービスは「障害者

† 創造都市研究科 博士（後期）課程都市情報環境研究領域

サービス」として考えられるが図書館サービスの中での「障害者サービス」と言われるものは、以前は「視覚障害者へのサービス」として受け取られがちであった。これは1970年代よりはじまってきた公共図書館における障害者サービスのはじまりが視覚障害者サービスであったことが考えられ、日本図書館協会障害者サービス委員会編集の『障害者サービス』補訂版のなかにおいても次のように述べられている。「図書館サービスの中で『障害者サービス』という言葉を使うとき、それは『視覚障害者へのサービス』を意味するものでも、『身体障害者へのサービス』を意味するものでもない。現在では『図書館利用に障害のある人びとへのサービス』という表現がもっとも的確に言い表していると考えられている。」<sup>1)</sup>とある。サービス対象者の捉えかたや考え方に変化がでてきており、現在では「図書館を利用するすべての人々」へのサービスという考え方になってきている。なんらかの障害がある人という意味では、視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由者、知覚障害者、LD(学習障害者)などの範囲を含んでいると考えられる。公共図書館は最も身近な地域における図書館であり、誰でもが広く利用できるような利用できる状態をも作り出していく必要を持つということでもある。そのためには障害を持つ人へのサービスについて、いろいろな工夫を行っていく必要が考えられ、利用対象者を考え、円滑な利用の推進という目的を持ち、多くの障害の種類に対して対応できるよう配慮を行っていく必要を背景として持っているサービスと考えられる。

## 2. 事例として：枚方市立中央図書館における障害者サービス

### 2.1 事例：枚方市立図書館中央図書館

ここでは障害者サービスに先駆的に取り組んできた枚方市立図書館中央図書館（以下、中央図書館と記す）を事例として見ることにより、公共図書館における障害者サービスを考える。

枚方市立中央図書館には「障害者・高齢者サービス」の担当が設けられているなど、図書館において活発に障害者サービスへの取組みがなされている図書館である。枚方市立中央図書館は開館が

2005年（平成17年）4月であり約50万冊を所蔵している。6階建て建物であり、3階にはITルームある。5階は障害者サービスの中心的な階となっており、「手話・字幕付放送コーナー」なども設置されている。京阪本線牧野駅から徒歩では約15分かかるが、駅からバスを利用した場合はバス停からはすぐの図書館となっている。この中央図書館ができるまでは障害者サービスは枚方市立樟葉図書館に視覚障害者の職員が配置されており、主に枚方市内の障害者サービスの中心であったが、この中央図書館ができたことによりその職員も中央図書館に転換となり、中央図書館は障害者サービスの中心となった。ではこの枚方市立中央図書館の概要をみていく。

次の表1は各フロアの案内、市内の図書館の数、職員数である。

表.1 枚方市立図書館：概要（各フロア案内、図書館数、職員数、冊数及び利用等）

表.1-1. 各フロア案内

1階	事務所・軽読書コーナー
2階	こどものフロア
3階	雑誌、マンガ、新聞コーナーとAV、ITコーナー
4階	成人(一般)図書のフロア
5階	障害者・高齢者サービスフロア、参考資料室、市史資料室
6階	多目的室、会議室

表.1-2 図書館数

図書館数	8館
分室	11分室
小学校図書室活用	1ヶ所
自動車文庫	2台/27ステーション

表.1-3 職員数

一般職員数	67人
非常勤職員数	53人
合計	120人

(職員数：平成17年度末の数)

表.1-4 冊数及び利用等

蔵書冊数	1,128,302 冊
購入冊数	61,363 冊
実利用者数	81,119 人
対面朗読実施回数	598 回

(すべて平成 17 年度実績)

(表.1 は枚方市立図書館ホームページ上の統計より作成)

この表 1 より枚方市内には 8 館の図書館があり、中央図書館はその中の 1 つである。分室は駅前にサテライトのものもあり、11 分室もあり、その数は少なくはない。小学校の図書室の活用や自動車文庫の取り組みも行われている。また蔵書は 100 万冊を越えており、図書館として活発に活動が行われていると考えられる。職員数は合計して 120 人であるが (平成 17 年度末現在)、一般の職員と非常勤の職員数はほぼ同じに等しく、非常勤の力に頼っているところが多いと考えられる。実利用者が約 8 万人おり、また対面朗読が約 600 回ほど利用されており、比較的図書館は利用されているものと考えられる。このように枚方市では図書館は比較的に利用に供せられている施設であると考えられる。中央図書館のもつ役割とはどのようなものであるのだろうか。

2008 年 7 月に中央図書館において視覚障害者サービス担当職員より、その活動内容等について聞き取り調査を行った。その中でわかったことは中央図書館には障害者・高齢者サービスの担当者が 4 名おり、主として視覚障害者サービス担当、聴覚障害者担当という役割分担が出来ているとのことであった。枚方市立中央図書館は、2005 年に開館した新しい図書館であり、建設時より障害者サービス全般を担当できる中心的な館となるように施設の建設がなされてきたとのことであった。中央図書館が出来た以前は枚方市立樟葉図書館において障害者サービスを取り扱っていたが、中央図書館の開館とともにその業務を引き継ぐ形で障害者サービスが移ってきたとのことであり中央図書館に障害者サービスが集約する形で集まり、障害者サービスに関する業務の効率化にも繋がったと考えられるとのことであった。しかし中央図書館の設立場所は駅などからはやや遠く、バスの利用が必要という点では交通の便は決してよいとは言いがたい場所である。この点は利用面では不便であり、特に視覚障害者などにとっては利用には

バリアがあるといえるが、施設的には図書館の建物は大きく、視覚障害者サービスなどでは専用に建設された録音室や対面朗読室などを備え、機能面では充実しており、また聴覚障害者向けのサービスにも力をいれていることがわかった。

## 2.2 枚方市立中央図書館での障害者サービス

中央図書館ではいろいろな障害者サービスに取り組んでいた。サービスの内容については様々であり広く障害者人たちが利用に訪れられる公共図書館として活動していると考えられる。利用サービスの内容については図書館の配布資料から次にあげていく。

### 2.2.1 目の不自由な人へのサービス

目の不自由な人への利用者サービスとしては次のようなものがある。

表.2 枚方市立図書館における視覚障害者向けの利用者サービス

サービスの種類	サービス内容
郵送貸出サービス	字・録音資料を自宅まで郵送。返却も郵送にて可能
自宅配本サービス	外出が困難な場合、図書などを自宅へ届ける
リクエストサービス	希望の点字・録音資料が市内の図書館にない場合は、全国の図書館から借りるか、新たに製作して提供
対面読書サービス	希望の本や雑誌などを、図書館で音訳者が読むサービス。1 回 2 時間まで。前もって予約が必要
拡大読書器	中央図書館等の 5 館に設置。自由に利用可能。老眼鏡や拡大鏡も各図書館に設置
拡大コピーサービス	枚方市立図書館の資料にかぎり有料で拡大コピーが可能

本の紹介	希望者へ本のリストを送付。 (各目録等はテープ版、デジ ー版、点字・活字版などの種類 が用意されている)読みたいも のがあれば申し込み可能
点字図書、点字雑誌	点字で作られた図書及び雑誌
録音図書・雑誌	カセットテープやCD、また近年 では DAISY(デージー)などに 録音された資料
大活字本	文字(フォント)を一般的な本よ りも大きく拡大した本。

このように目の不自由な人に対するサービスは  
様々なものがある。点字図書や録音図書などは郵  
送による貸し出しも可能であり、障害者サービス  
にとっては重要なものである。

### 2.2.2 耳の不自由な人へのサービス

耳の不自由な人への利用者サービスとしては次  
のようなものへの取り組みがされていた。

表.3 枚方市立図書館における視覚障害者向けの  
利用者サービス

サービスの種類	サービス内容
ファクシミリによ るサービス	本の予約や調べものの依頼 など。ファクシミリで図書館と 連絡をとれる
「手話でたのしむ おはなし会」	毎月第4土曜日に中央図書 館で開催。耳の不自由なこど もたちにも楽しんでもらえるよ う手話をまじえる
中央図書館の利 用案内	ビデオ版、DVD 版あり。図書 館の利用の案内。手話と日本 語字幕で
中央図書館5階 「手話・字幕付放 送コーナー」	手話と字幕の番組を利用でき るようデジタルテレビを設置
「補聴器サポ ート システム」	中央図書館の各階カウンタ ーに「耳の遠いかたに音声をは っきり聞こえる装置」を設置

「耳マークシー ル」と「手話バッ チ」	希望があれば貸出カードに 「耳マークシール」を貼る。窓 口でこのシールを見せると、 職員が手話や筆談で話を行 なうサービス。胸に「手話バッ チ」をつけた職員は手話がで きる
「マンガ」資料	中央図書館等の4館及び9分 室にて所蔵。

「手話・字幕付放送コーナー」は一人の利用で  
はなく、グループ利用が可能でありテレビ画面  
を囲んで半円形上に椅子が配置されていた。枚  
方市立中央図書館は聴覚障害者に対する利用者  
サービスが実にさまざまであり、特に耳マーク  
や手話バッチなどは図書館側から利用者へ向け  
てのアピールを行っているものであり、障害者  
サービスの推進のひとつの方法であるといえる。  
公共図書館での聴覚障害者へ対する試みのひと  
つであり、図書館の取り組みの事例であるとい  
える。

### 2.2.3 手足などの不自由な人へのサービス

また手足の不自由な人への利用者サービスとし  
ては次のようなものがあげられていた。

表.4 枚方市立図書館における身体の不自由な人  
への利用者サービス

サービスの種類	サービス内容
対面読書サービ ス	希望の本や雑誌などを、図書 館で音訳者が読むサービス。1 回2時間まで。事前予約必要
自宅配本サービ ス	車椅子利用の方や寝たきりの 方など外出が困難な場合、図 書などを自宅へ届ける

病院・高齢者施設へのサービス	枚方市内の2病院と市内の高齢者施設へ自動車文庫が2週間に1回、本の貸出を行っている。またこれら2病院の小児病棟では2カ月に1回、行事を開催
録音図書・雑誌	カセットテープやCD、DAISY（デージー）などの録音資料の貸出。

表.4からもわかるように対面朗読や録音図書などは視覚障害者のみならず肢体不自由の人たちなど、障害をもつ人たちに広く役立てられていく可能性をもつものであり、その意味で音（声）に変換された図書資料などは著作権などの問題とのかかわりが大きいと考えられる。

以上のように枚方市立中央図書館では手足の不自由な人へのサービスにも取り組んでおり、障害者サービスの取り組みの広さがわかるものであった。

### 3. 中央図書館の IT ルーム

枚方市立図書館では視覚障害者や聴覚障害者のみならず肢体不自由な利用者に対しても様々なサービスに取り組んでいることがわかった。また中央図書館では5階には「障害者・高齢者サービスフロア」があり、視覚障害者や肢体不自由な人たちが利用しやすいパソコンを設置し、インターネットの検索や文書作成などが行えるような試みに取り組む IT ルームもあり、自動朗読ソフトやスキャナなどを使って活字の資料を読み上げることもできるなど、各種のソフトウェアと周辺機器の操作サポートも行っていた。公共図書館内に多くの機器が配置されており、その取り組みは情報化社会へと発展してきた現在の社会状況に役立っていくものと考えられる。

枚方市立中央図書館間では様々な障害者サービスに積極的に取り組んでおり、視覚障害者、聴覚障害者、肢体不自由な人へと利用者サービスが具体的に挙げられており、利用者側にとってもわかりやすく、この点は他の公共図書館においても見習っていくべき点だと考える。各公共図書館でもこうした積極的な取り組みが期待されるものであ

る。

## 4. 図書館利用に障害のある人々へのサ

ー

### ビスについて

#### 4.1 「図書館利用に障害のある人々へのサービス」のなかでの視覚障害者への資料とは

枚方市立中央図書館という障害者サービスへ積極的に取り組んでいる公共図書館についてみてきた。現在の公共図書館における障害者サービスは先にも述べたように視覚障害者サービスだけではなく図書館利用に障害のある人々へのサービスとして対象者は広く捉えられている。その意味で枚方市立中央図書館における取り組みはこの考え方にあったサービスである。本章では日本図書館協会障害者サービス委員会編集の1998年と2005年の障害者サービスについての全国の図書館への調査のなかで視覚障害者サービスに視点を置き、視覚障害者サービス関係の資料の数より視覚障害者サービスへの情報提供環境を考えていき「図書館利用に障害のある人々へのサービス」の考察を行なう。

#### 4.2 研究目的及び研究方法

本項では「図書館利用に障害のある人々へのサービス」全国調査報告書の1998年調査と2005年に行われた「障害者サービス全国実態調査報告書」を取り上げ、公共図書館における視覚障害者サービス関係の資料の数についての変化数から視覚障害者サービスへの資料取り扱いの考察を行なうことで図書館における資料点数の伸びから障害者サービスの考察を行なうことを目的とする。また2005年の所蔵タイトル数と巻冊数の1館あたりの平均とを日本における点字図書館の代表的存在である日本点字図書館の2006年4月1日現在の所蔵タイトル数及び巻冊数とを比較することにより、公共図書館の視覚障害者サービス関係資料数について点字図書館との違いなどを比較してみていくことで、公共図書館の視覚障害者サービスの資料傾向について把握していく手がかりとした。

日本図書館協会障害者サービス委員会編『図書館利用に障害のある人々へのサービス 全国調査報告書 1998年調査』と日本図書館協会障害者サービス委員会編『障害者サービスの今をみる 2005年障害者サービス全国実態調査（一次）報告書』を用い、視覚障害者にとっての情報入手の主な方法である点字と録音のそれぞれの図書と雑誌を所蔵している公共図書館の1館あたりの平均所蔵タイトル数と平均巻数、平均冊数を調べてみた。これにより視覚障害者への資料提供における傾向などが考察できると考えた。調査結果は表.5 と表.6 にあげる。

表.5 資料調査で回答有の公共図書館の所蔵タイトル数について

		所蔵タイトル		1館あたり 平均タイトル数
		館数	タイトル数	
録音図書 (テープ版)	1998年	399	152994	383.4
	2005年	423	180617	427
	増加率	106.00%	118.10%	111.2
録音雑誌 (テープ版)	1998年	64	2405	28
	2005年	84	4387	52.2
	増加率	97.70%	182.40%	185.7
点字図書	1998年	359	69285	193
	2005年	644	99827	155
	増加率	179.40%	144.10%	80.3
点字雑誌	1998年	191	2014	10.5
	2005年	264	7128	27
	増加率	138.20%	353.90%	245.4

表.6 資料調査で回答有の公共図書館の所蔵巻数、冊数について

		所蔵数		1館あたり 平均巻数、 冊数
		館数	巻数、 冊数	
録音図書 (テープ版)	1998年	498	662494	1330.3
	2005年	440	776266	1764.2
	増加率	88.40%	117.20%	132.6
録音雑誌 (テープ版)	1998年	69	15540	225.2
	2005年	72	25040	347.8
	増加率	104.30%	161.10%	154.7
点字図書	1998年	500	287145	574.3
	2005年	705	314008	445.4
	増加率	141.00%	109.40%	77.5
点字雑誌	1998年	155	18877	121.8
	2005年	202	44671	221.1
	増加率	130.30%	236.60%	181.1

この表.5 と表.6 より録音図書・雑誌資料及び点字図書・雑誌の所蔵タイトル数と1館あたりの平均タイトル数、また所蔵している巻数と冊数及び1館あたりの平均巻数と冊数がわかる。一般的に公共図書館における視覚障害者サービスの資料は非常に少ないと言われているが、表.5 と表.6 より1998年と2005年の調査でタイトル数などに増加の傾向がみられるものが多い。資料として点字の資料と音声による録音資料が一般的に利用されており、表.5 と表.6 で調査比較を録音図書と録音雑誌、また点字図書と点字雑誌を取り上げることで行った。2005年の調査においてはデジタイズと呼ばれるデジタル方式で録音された資料点数もあげられていたが、1998年の段階ではまだ製作されていなかった資料であるので、今回はデジタイズの数

とりあげなかった。また1館あたりの平均数は筆者が計算したものであり小数点第一位までを表示した。

1998年の調査から2005年の調査では録音図書をはじめとしてほぼ増加率があがっており、こうした数字だけを見ると1998年から2005年の間に公共図書館における視覚障害者への資料は増加の一途をたどっている傾向にありサービスの向上が考えられる。但し点字図書だけは1館あたりの平均タイトル数と平均館冊数の増加率が70パーセント後半～80パーセント程度であり、このことは点字図書を使う人が減ってきているのではないかと考えられるものである。しかし点字雑誌のタイトル数と巻冊数の増加率は非常に高いものであり、点字では図書よりも雑誌にその利用の人气が高まってきたのではないかと考えられるが、パソコン点訳などで雑誌の点字への変換が増えたなどの要因も考えられ、一概には理由をいうことはできない。但しこの調査結果では点字雑誌は点字図書よりも増加率が上がっているという傾向が伺えるということである。また雑誌における増加傾向は録音図書と録音雑誌においても同じである。録音資料の場合は音声訳一括許諾システムなどの影響も考えられ、雑誌の音訳化が行いやすくなってきたのではないかとこの要因が考えられるが一概に要因はわからないが点字資料同様に雑誌のほうが増加率がよい。この表.5、表.6より録音資料、点字資料ともに増加傾向がみてとれ、図書、雑誌の増加率の違いはあるが公共図書館において視覚障害者向けの資料が増えていっていることはわかった。先の枚方市立中央図書館の事例のなかでも録音及び点字資料の利用サービスがあげられており、公共図書館において録音資料や点字資料の活用はすすめられていくものと考えられる。

#### 4.3 日本点字図書館の蔵書数との比較

表.5及び表.6の数値をみただけでは視覚障害者サービス関係の所蔵資料について、特に蔵書点数的に多いのかどうかということが掴みにくかったことより、視覚障害者サービスを主たる業務として資料を作成、収集している点字図書館との比較をおこなってみることとした。ただし同じ年度に点字図書館で同様の調査が見当たらなかったため、今回は点字図書館のなかで先駆的に活動を行って

きた歴史をもち、点字図書館のなかで代表的存在である日本点字図書館をその対象として考えた。なぜならば日本点字図書館ホームページ上にちょうど所蔵資料点数において2006年4月1日の数値が掲載されており、2005年度の調査とほぼ近い時期の数であり、比較して考察を行なうのに適していると考えたからである。表.7において日本点字図書館の蔵書数をあげる。

表.7 日本点字図書館の録音図書及び点字図書の蔵書数

		蔵書	
		巻数	タイトル数
録音図書	2006年	341,679	20,038
点字図書	2006年	98,633	23,569

(平成18年4月1日現在)

表.7よりわかるように日本点字図書館のみで録音図書が30万巻以上、タイトルも2万タイトル以上を所蔵している。点字図書も9万巻あり、こちらも2万タイトル以上の所蔵をもつ。しかし表.5及び表.6からわかるように録音図書は調査した館のものすべてを合計しても70万巻弱であり、1館あたりの平均になると1800巻程度にすぎない。またタイトル数は20万弱あるが1館あたりの平均タイトルをみると約400のタイトルになる。点字図書においても30万冊で1館あたりは450冊程度、タイトルは9万タイトルで1館あたりの平均は約150タイトルであり、遠く日本点字図書館の数には及ばない。点字図書館は視覚障害者へのサービスを中心として資料を収集しているとはいえ、日本の公共図書館が録音図書および点字図書のタイトル数だけで見て約550タイトルあまりしか平均で所蔵していない現状はまだまだ公共図書館における視覚障害者サービス関係の資料点数の少なさが実態としてあがってきていると考えられる。

## 5. さいごに

今回は1998年及び2005年の調査を用いて録音図書・雑誌や点字図書・雑誌などの視覚障害者関係資料の所蔵点数に視点を置いて数字をみていったが、視覚障害者サービス資料のなかで拡大写本といわれる大活字の資料や布などで製作されたさわる絵本などの資料を考えていった場合、さらに



少ない数値があがってくるものと予測される。また録音図書・雑誌などは本稿で事例とした枚方市立中央図書館においては肢体不自由の人たちへの利用者としても取り上げられており、その利用の範囲が視覚障害者サービスのみではないものを考えさせられる。今日の公共図書館における障害者サービスについて事例をあげるとともに 1998 年及び 2005 年の図書館利用に障害のある人々へのサービスの中から特に視覚障害者向けの資料である録音と点字資料点数を取り上げて考察を行い日本の視覚障害者サービスの資料点数は増加の傾向であり、雑誌の増加率が図書よりも多いことがわかった。しかし一館あたりの所蔵タイトル数などはまだまだ十分な所蔵数とはいいがたく、枚方市立中央図書館など障害者サービスに積極的に取り組んでいる公共図書館などを参考にして障害者サービスの対象者を考え、所蔵資料点数の増加、充実化への取り組みを行っていくことが重要と考える。

## 引用文献

1.) 日本図書館協会障害者サービス委員会編『図書館員選書・12 障害者サービス』補訂版 2003 年, p.15

## 参考文献

- 1.) 近畿視覚障害者情報サービス研究協議会編『視覚障害者サービスマニュアル 2007』(有)読書工房, 2007 年
- 2.) 社団法人日本図書館協会(障害者サービス委員会)ホームページ「図書館協力者ガイドライン」<http://www.jla.or.jp/lsh/guideline0504.html> (2007 年 6 月 3 日確認)
- 3.) 田中章治「障害者サービスの現状と課題—その理論的実践的飛躍をめざして」『図書館サービスの拡大と深化』p.17-23, 1982 年
- 4.) 図書館問題研究会編『障害者と図書館：図書館奉仕の原点としての障害者サービス』ぶどう社, 1981 年
- 5.) 日本図書館協会障害者サービス委員会編『図書館員選書・12 障害者サービス』補訂版 2003 年
- 6.) 日本図書館協会障害者サービス委員会

『図書館が変わる：1998年公共図書館の利用に障害のある人々へのサービス調査報告書』日本図書館協会, 2001 年

- 7.) 日本図書館協会障害者サービス委員会編「障害者サービスの今をみる：2005 年障害者サービス全国実態調査(一次)報告書」日本図書館協会, 2006 年
- 8.) 日本点字図書館ホームページ「図書館概用」の項目における統計(平成 18 年 4 月 1 日現在) [<http://www.nittento.or.jp/soumu/gui-01.htm> 2009 年 1 月 16 日確認]
- 9.) 枚方市立図書館 中央図書館ホームページ [<http://www.city.hirakata.osaka.jp/freepage/GYOUSEI/TOSHOKAN/library6/sisetsu/c huou.htm> : 2008 年 1 月 6 日確認]
- 10.) 山元亮「聴覚障害者(ろう者)サービスの充実を目指して—一枚方市立図書館から」『図書館雑誌』 vol.101, No.5, p.298-300, 2007 年 5 月